



月報

No. 432
2016年
5月

日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目34-35

<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『あなたはほんの少しのものに忠実だった』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 25章14節～30節

¹⁴ 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。¹⁵ それぞれの力に応じて、一人には5タラント、一人には2タラント、もう一人には1タラントを預けて旅に出かけた。早速、¹⁶ 5タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに5タラントをもうけた。¹⁷ 同じように、2タラント預かった者も、ほかに2タラントをもうけた。¹⁸ しかし、1タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。¹⁹ さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。²⁰ まず、5タラント預かった者が進み出て、ほかの5タラントを差し出して言った。『御主人様、5タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに5タラントもうけました。』

²¹ 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』²² 次に、2タラント預かった者も進み出て言った。

『御主人様、2タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに2タラントンもうけました。』²³ 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』²⁴ ところで、1タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、²⁵ 恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』²⁶ 主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。²⁷ それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。²⁸ さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、10タラントン持っている者に与えよ。²⁹ だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。³⁰ この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

この有名な「タラントンの譬え」は、私たちが信仰生活を送るうえで、また、伝道にたずさわるうえで、基本となる親しみやすい話です。

昔話（例えば『三びきのやぎのがらがらどん』）のように、三通りのパターンが繰り返されます。これを話してもらう人は、三通りの中で、変わらない部分と変えられる部分とを聞き分けながら、最後まで集中することが求められています。一度読んだきりでは、微妙な違いが聞き漏らされることでしょう。再読してもらい、一貫している事柄に潜む変化をつかみ取ることが大切です。

「タラントンの譬え」には、まさに、5タラントンの人、2タラントンの人、そして1タラントンの人というように、三パターンが出てきます。それぞれの人の特徴を見抜くと共に、譬え話全体として、主イエスは何を語ろうとされているのか、捉えることにしましょう。大まかに言えば、5タラントンの人と2タラントンの人に対し、1タラントンの人は対照的に描かれており、なおかつ、5タラントンの人と2タラントンの人の様子にも一部違いが見られるということです。

今回、マタイ福音書25:14-30について、「あなたはほんの少しのものに忠実だった」という説教題を付けました。次回は週報に予告されているように、マタイ福音書25:31-46、説教題「いと小さき者の一人になしたるは」です。

これから（マタイ26章以下）、受難、十字架の死が起ころうとする時に語られた譬えにおいて、主イエスは同じような角度から私たちに勧めをしています。つまり、主イエスは、ほんの少しのもの、また、いと小さきものという観点から、福音あるいは神の御心を説き明かしています。

マタイ福音書25:23――

主人は言った。『お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。』

主人が発したこの帰結の言葉は、警句でありになっています。すなわち、「少しのもの」と「多くのもの」とを際立たせつつ、「として常に主人に忠実であれ！ へりくだって管理者として働きなさい！」という意味内容になっています。欲得によって自分の目が曇りがちになることをわきまえずに、私にとっては「少しのもの」だと見下すような態度が戒められています。

ほんの少しのもの、また、いと小さきものという観点から、主イエスが私たちに求められているのは、いつも、あらゆることに（だからこそ神の御力に任せて）忠実に生きるということです。主イエスがこのタイミング（説教の最終場面）で、二つの譬え連続で、そのように告げられたのは、澄んだ目で「ほんの少しのもの」を見通すのでなければ、十字架の光を仰ぐことが出来なくなるという心配りであったのでは

ないでしょうか。

マタイ福音書25:14-15――

14 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。15 それぞれの力に応じて、一人には5タラント、一人には2タラント、もう一人には1タラントを預けて旅に出かけた。」

「天の国」の話とされています。一瞬、天国でも私たちは働かなければならないのか、と思われるでしょうか。これは、天国で私たちが為すべきことの予告ではありません。主イエスと共に今、「神の国は近づいた」（マルコ1:15）のだ、やがて天の国に入れられるその喜びに、今満たされて、この世で存分にタラントを活用しなさい、ということです。

さて、「タラントの譬え」を読むとき、私たちは、5タラント、2タラントの人、そして1タラントという、人間同士の違いが気になります。しかし、注意深くこの譬えを読むと、すべての人を慈しむ神の公平性が担保・保証されていることは明白です。

15節の「それぞれの力に応じて（預けた）」というその「力」は、そもそも神が人間に与えられたものです。一人ひとり、その「力」において個性や大小があったとしても、それは神から降って来た「力」です。原語では、デュナミス（ダイナミットの語源）と言い、「力ある業」または「奇跡」を指し示しています。パウロの書いたフィリピの信徒への手紙3:10には、「わたしは、キリストとその復活の力（デュナミス）とを知り」という用法があります。取るに足りないように思われる私の「力」も、主の十字架と復活の「力」に基づいているのです。このように、莫大なものが私たちに注がれているのは、神の恵み以外の何ものでもありません。

さらにその上に、神からそれぞれの人に、5タラント、2タラント、そして1タラントが預けられました。これがまた、莫大な額で、現在の値打ちで言えば、それぞれ、3億円、1億2千万円、そして6千万円に相当します。神は、それぞれ異なった賜物を、私たちに分け与えられています。

マタイ福音書25:16――

5タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに5タラントをもうけた。

このを読むと、私たちはどうしても、5タラントを倍増したの手腕、すなわち、功績や立派な行いに思いを寄せがちです。しかし、そのこと以上に、神がその人の人生を用い、苦しみや悲しみを乗り越えさせて、その信仰者において神の計画を成し遂げられたということを思い浮かべるべきでしょう。

三通りのパターンの内、5タラントの人から始められていることを素直に受け取るならば、私はここに、主イエスの力強い招きがあると信じます。後に出てくる2タラントの人と1タラントの人との描写を通して、5タラントの人の信仰と行いを引き立たせ、そして、神と5タラントの人との交わりへと、私たちすべてを立ち帰らせようとしています。

それでは、託された物を倍に増やした、一番目の5タラントの人と、二番目の2タラントの人との違いは、どこにあるのでしょうか？

マタイ福音書25:20――

まず、5タラント預かった者が進み出て、ほかの5タラントを差し出して言った。

が主人の前に「進み出て」、主人に向かってひれ伏す様が丁寧に描かれています。この節の「差し出して」は、2タラントの人の並行箇所（22節）には出てきません。主人と「・奴隸」という堅い関係の中で、僕の謙遜さが「差し出す」という行為となって現れています。自分が増やしたというその背後にある主なる神のご好意に感謝して、あたかも「お返ししている」かのようです。

後続のマタイ福音書25:31-46は、羊とのように、人が王の右側と左側に分けられたという二パターンの

話です。その初めの方の「父なる神に祝福された人たち」の行為に……

マタイ福音書25:37-39——

³⁷すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。³⁸いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。³⁹いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』

私たちの目には見えなくとも、神は臨在されています。主イエスは、小さな愛のわざをご覧になっていました。神に救われた者として、神に「差し出し」（お返しし）、助けを必要としている隣人に「差し上げる」よう勧められています。

パウロの神学によれば、礼拝の中で、私たちが神に応答すべきことは、賛美・感謝・告白の三つに要約されます（ローマ10:9、Iコリント10:16、IIコリント1:3,11など）。私たちは、へりくだりのうちがく、神に「差し出した」というその信仰と行為を、賛美・感謝・告白によって受け継いでいます。その点で、神に「差し出した」5タラントンの人にう者となれますように、というのは、私たちの切なる祈りです。

次に、1タラントンを預けられた人の様子を見てみましょう。三通りのパターンに共通することですが、彼もまた、主人の前に「進み出て」言います（マタイ25:24）。言い換えれば、すべての人が最後の審判に召喚されているということです。そこで、栄光の座につかかっているキリストによって裁きを受けるのです。この譬えを聞いている人は、前の二通りとは対照的な事態となるであろうと、予測しながら神妙に耳を傾けることでしょう。

マタイ福音書25:18——

しかし、1タラントンを預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

マタイ福音書25:24-25——

²⁴ところで、1タラントンを預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、²⁵恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』

1タラントンを預かった者は、減らしたくない、という守りの姿勢に入りました。彼は、主人に譬えられている神のことを、「厳しい方だ」と言っているように、一面的にしか捉えていませんでした。彼は、裁きの先にある救いを信じて待つというのではなく、今ある幸福と安全にしがみついていた。自分が働けば損か得か、と言うばかりで、神の愛の働きと増加の中に、自分も加えさせていただくという謙虚さに欠けているのでした。

対比されている5タラントンと2タラントンの人について、E.シュヴァイツァーは次のように説き明かしています。

の中の二人は、最悪の場合は賜物全部を失うという危険を冒して、何ごとかを行う。

彼らは冒険した、つまり、二人のは、神から与えられたタラントンを、ひと度、手放す勇気があったと言います。自分の思い通りではなく、聖霊の導きによってこそ、神から私たちに与えられた賜物は開放され、生き生きと働き、新しいものをつくり出していくのです。より広い世界に飛び出して、タラントンの意外な使い道を探り当てる人は、幸いです。

先に、この「タラントンの譬え」というのは、三通りのパターンの内、5タラントンの人のような豊かな信仰生活へと、私たちすべてを招いている主イエスの呼びかけではないか、とお話ししました。そのよ

うな神のいを象徴する一句があります。

マタイ福音書25:21――

主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

「主人と一緒に喜んでくれ」（25:21,23）という命令は、直訳すれば、「あなたの主人の喜びの中に入りなさい」となります。この神のご命令について、J.シュニーヴィントは、あたかも天国の祝宴や主の晩餐へ招待であるかのように、「喜びの中に」は恐らく「祝宴の中に」との意味だと解しています。

一方で1タラントンの人に下されている正反対の厳命、「外の暗闇に追い出せ」（マタイ25:30）というのは、つかの間のしなどではないでしょう。その背後には、一人も滅びないで、「喜びの中に入りなさい」と、繰り返し呼びかけられる神の忍耐と憐れみがあることを知るべきです。

主ご自身が喜び踊っている、その輪の中へ来たれ……もっと深く読み味わうならば、主人すなわち神と「共に喜ぶ」というのは、最終の目的であると同時に、私たち・信仰者の人生の意味そのものではないでしょうか。

ゼファニヤ書3:17――

お前の主なる神はお前のただ中におられ

勇士であって勝利を与えられる。

主はお前のゆえに喜び楽しみ

愛によってお前を新たにし

お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。

「お前」は直接には、エルサレムの民を指しています。都の崩壊と神の憤りの中で、恐れ、力なく手を残しているシオンの民です（ゼファニヤ書3:16）。従って、それは、主イエスによって伝道されながらも、迫り来る十字架の暗闇の中で、恐れ、たたずんでいたその当時の人々とも言えるでしょう。

その日（大いなる救いの日）に、神は、死と罪の暗闇を突き破り、まことの喜びをもたらされます。その奇しき出来事と、私たちが関わりないということは決してない……それが「お前のゆえに」喜びが湧き上がってくるという一方的な神の宣告です。

説教の最初の方で、この「タラントンの譬え」は、私たちが信仰生活と伝道について考えるうえで、基本となると言いました。それでは、私たちが私たちのタラントンを倍増するとは、どういうことでしょうか？

それは、一人が一人を連れて来る、ということで、皆が協力して伝道するという事にほかなりません。求道されている方が、主と共なる喜びの中に入って来れるよう、助け導くことです。

また、タラントンというのは、キリストの愛をあらわしているという見方（松永希久夫）があります。

確かに、私たちは、主イエス・キリストの成し遂げられた御業に、すなわち、十字架に架かり、人々の罪を贖い、神の愛と赦しをもたらすという大いなる救いの業にあずからせていただいている者です。弱く貧しい者、赦された罪人にほかなりません。私たちが、「キリストの愛」なのではありません。しかし、絶大な力をもつキリストの愛によって救われ、支配されている者として、土の器のように、私たちはこの愛を隣人のもとへ運ぶことが許されています。私たちは何よりも、キリストの愛を宣べ伝え、また、その愛を実践することで、自分の注がれている賜物・タラントンを活用することができます。

父なる神が、いつも小さいように感じられる（1タラントンにも満たない）この私のもとへ、主イエス・キリストを遣わしてくださいました。「お前のゆえに、私は歓喜している。お前も救われた者として、いつも喜んでいなさい」とおっしゃっておられます。神の招きと力に応じて、忠実なとなれますよう

祈りましょう。

茅ヶ崎香川教会月報
No. 432

2016年5月29日発行
編集発行：日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
発行責任者：小河信一
編集責任者：鈴木隆二